

難治性とがん保険

知ってトクする 職域がん対策 — vol.6



先日、東大医学部時代の恩師である養老孟司先生の箱根仙石原の別荘で、雑誌の対談をしました。山裾に広がるすすきの草原がステキでした。

これまでの連載でも触れたように、先生の「小細胞肺がん」は再発していて、抗がん剤と免疫チェックポイント阻害剤による「標準治療」を受けています。もともと、医療や病院とは距離を置き、とくに「抗がん剤などまっぴらご免」と言っていた先生が「宗旨替え」をした理由をきくと、「愛する家族のために、天涯孤独なら、治療を受けなかった」と言われ、とても印象的でした。

小細胞肺がんは抗がん剤が有効であることも理由の一つにちがいません。また、新しい体験から、考えや態度を変えていく柔軟性を87歳の先生はお持ちなのでしょう。

自分はなんとしても良いが、家族のために治療を受けるといふ患者は少なくありません。養老先生も「死は自分のものではない」と言われます。たしかに、自分の死は生きている者にしか影響を与えません。「二人称の死」が本当の意味での「死」だと言えます。



別荘では、奥様にもお目にかかりましたが、今回のがん罹患経験を糧に、養老先生もご家族もさらに成長されたように感じました。

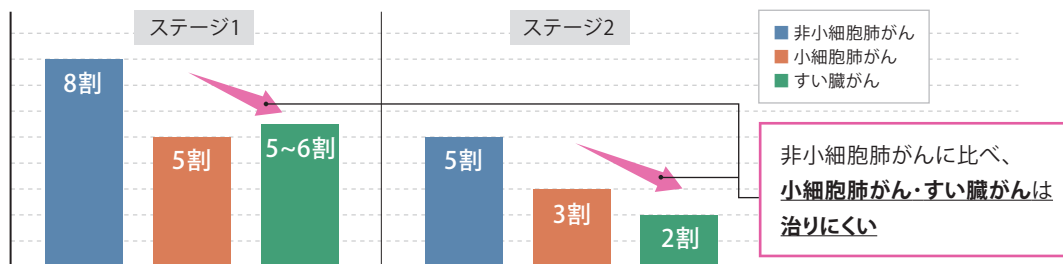
さて、小細胞肺がんについては、ドン・キホーテの創業者の安田隆夫氏(76)が現在、このがんで闘病中であることを週刊誌で公表しています。養老先生とちがい、東大病院で治療しているわけではありませんが、私も複数回、ご相談を受けたことがあります。

安田氏といえば、「驚安の殿堂ドン・キホーテ」の創業者で、一代で年間売上2兆円の巨大企業を築き上げた人物です。安田氏は、週刊誌の取材で、次のように述べています。「現在、私は最末期とも言えるがんを患っています」、「進行と転移のスピードが速く、五年後の生存率は2%かそれ以下だ」というんです。青天の霹靂でした」。

肺がんは、小細胞がんとそれ以外の非小細胞がんに大きく分けられます。小細胞がんは肺がんの1割程度を占め、安田氏が述べたように悪性度が高く、ステージ1でも5年生存率は5割、ステージ2で3割程度です。非小細胞肺がんのステージ1、2の5年生存率は8割、5割くらいですから、小細胞肺がんの治りにくさが分かります。

すい臓がんも、ステージ1、2の5年生存率は5～6割、2割程度で、小細胞肺がんと並ぶ手強いがんの代表です。

がん種別・ステージ別の5年生存率



さて、若い移民を入れてこなかった日本では、高齢が働かなければ、経済成長も社会保障制度の維持もままなりません。がんは一種の老化ですから、働くがん患者が増えることになります。かつて、定年は55歳でした。男性がこの年齢までにがんを罹患する確率は5%もありますが、70歳まで働けば2割を超えてしまいます。「がん社会」では治療費の他、「減収」も大きな問題になります。

がんによる経済的ダメージを緩和する手立ての一つが、「がん保険」ですが、がんのタチの悪さに応じた保証が必要だと思ってきました。この考えを、中小企業向けの生命保険に強みを持つ大同生命に伝えたところ、進行がんや難治性がんにフォーカスした新しい保険も誕生しています。

今、がん保険も急速に進化しています。「保険のセカンドオピニオン」も大切だと思います。

定年延長＝がんと共に働く時代に

55歳までの
がん罹患リスク
→ 5%未満



70歳までの
がん罹患リスク
→ 20%以上

罹患リスクの上昇



中川 恵一（がん対策推進企業アクション アドバイザリーボード議長）

東京大学大学院医学系研究科 総合放射線腫瘍学講座 特任教授、厚生労働省 がん検診のあり方に関する検討会元構成員、がんの緩和ケアに係る部会座長、文部科学省がん教育のあり方に関する検討会委員など。

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、准教授を経て現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長などを歴任。著作には「がんのひみつ」「コロナとがん」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。

YouTube

「オトナのがん教育」講座「教えて中川先生!がんって何?がんになっても働けますか?」

好評配信中!

